活 動 成 果 報 告 書

令和６年度（第２８回）「チヨダ地域保健推進賞」

活動テーマ

緩和ケアボランティア育成に新たな道を！
～がんを患う市民の社会参加に寄り添う～

グループ名称･氏名（グループの場合は代表者名）
北上市 健康こども部 健康づくり課 成人保健係
代表者：志田　光希

勤務先：北上市役所
所　属：健康こども部　健康づくり課
所在地：〒０２４－００９２
　　岩手県北上市新穀町１－４－１
ＴＥＬ：０１９７－７２－８２９６
ＦＡＸ：０１９７－６５－３８３４

本活動は北上市の緩和ケアボランティア（北上市緩和ケア支援事業ボランティア会の会員）の育成という課題に対して、単年度で効果的、かつ継続が期待できる対応を行った事例です。活動は現在も継続しており、「地域におけるがん療養中の方の支援」という地域課題に対して、有用な情報と考え、共有させていただきます。

◇活動方針

北上市緩和ケア支援事業ボランティア会（以下ボランティア会）の活動は、がん療養中の方を訪問してのお手伝い（以下、訪問）と、脱毛された方へ贈る綿帽子の作製（以下、綿帽子作製）です。会員数確保は長年の課題でしたが、がん療養中の方の支援希望数が増加してきたことにより希望に応えられない事態が近年特に顕在化していました。

そこで対策の検討を開始しました。活動の方針決めにあたっては、先ず、緩和ケアの現場を熟知するボランティア会員や医療関係者に問題の共有と事実確認を行いました。その時点で「綿帽子作製を希望する市民が存在する」情報を得ており、また「訪問に比べ綿帽子作製は気軽に取り組みやすい」特徴を踏まえ、次の２つの方針で取り組みました。

１．ボランティアを希望する市民を増やす「”希望者を養成”からの方針転換」

「最初から、ボランティア希望者を募集する」従来の方法を見直し、「がんや緩和ケアについて関心を持つ市民を増やす」ところから始める。

２．従来なかった綿帽子作製のみを担うボランティア活動の容認

会員に限定していた綿帽子作製に会員以外も携われるようにする。

活 動 成 果 報 告 書

◇活動内容

先の方針に基づき、下記の活動に取り組みました。

１．広く一般市民向けにがんや緩和ケアを周知する「市民学習会」を開催

より多くの市民にがんや緩和ケアについて知っていただきながら、ボランティアに興味を持つ方を増やすため、ボランティア会と緩和ケアの専門医師/認定看護師の協力を得て「市民学習会」を開催しました。市民学習会開催後は、参加者の思いや疑問を共有できる茶話会も企画しました。

２．会員以外にも対象者を広げた綿帽子作製勉強会の開催/壁になっていた実施要領の改正

市民学習会の後、従来は会員間で開催していた綿帽子作製勉強会を、会員以外も見学・参加できるように門戸を広げて開催しました。また、勉強会に先立って、従来、活動が会員に限られていた実施要領の記載や、「養成講座を受講しなければ会員登録できない」という関係者の誤解に気づきました。そのため「会員登録前でも綿帽子作製の活動が可能」になるように、会員や関係者に周知すると共に、ボランティア会の要領にも明記する改正を実施しました。

◇活動成果

当初の方針にそった活動を通して、主に４点で成果が得られました。

１．ボランティア育成の入口として多くの市民の関心を得ることに成功

市民学習会には 68 名、その後の茶話会には 30 名が参加し、がんや緩和ケアについて知っていただき、ボランティア活動に関心を持っていただけました。この盛況により、既存会員にも今後のボランティア育成に対する手ごたえを実感していただけました。

２．綿帽子の追加寄贈の実現

新規綿帽子作製メンバーが約 30 名増え、約 3 カ月の間に多数の綿帽子が完成しました。例年、綿帽子は市内の総合病院へ寄贈していましたが、今年度は寄贈数が過去最低の 16 個に留まっていました。今回の綿帽子作製勉強会の開催をきっかけに、２カ月後に 47 個、３カ月後には 50 個の帽子が完成し、追加で寄贈したことで、例年以上の寄贈数を実現しました。

３．綿帽子作製を入り口とした、ボランティア育成の可能性

今回の綿帽子作製がきっかけとなって「訪問ボランティアもぜひやってみたい」という方がいらっしゃいました。また、病院主催のイベントに別途参加される方も確認できたことから、「綿帽子づくりが緩和ケアボランティアの入り口になる」可能性を示していると考えます。この想定以上のボランティア育成経路の可能性については、次年度以降も注視していきます。

４．ボランティアへの動機付け・成果の見える化の重要性

報道機関の取材に対して、活動内容の説明資料を工夫したところ、掲載や放映数が例年１～２件から４件に増えました。報道後、ボランティア会員から「昔の友人から久しぶりに連絡が来た」という声が届き、市内外からボランティアへの参加希望の問い合わせを受けました。このことから活動を持続可能なものにするために当事者へ「成果を見える化」することの重要性を再認識しました。

活 動 成 果 報 告 書

◇今後の計画

今回の取り組みでは、前例踏襲ではなく原因を追究して効果的な解決策を考えたことで、裾野を広げる活動を行うことができました。今後も、関係者と対話を重ねながら裾野を広げる活動の内容や開催形態を検討していきます。また、訪問ボランティアの増員に向けた取り組みも検討中です。